

# 信州読書会 YouTubeLive&ツイキャス読書会

## 課題図書 ジェーン・オースティン 『高慢と偏見 38章から最後まで』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

YouTubeLive <https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 <https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 251 回のツイキャス読書会の課題図書は、ジェーン・オースティンの『高慢と偏見 38章から最後まで』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 『高慢と偏見 下』 感想文

ようやく読み終わりました。上巻の残りの半分も読みました。

最後のほうでキャサリン令夫人が、ダーシー氏とエリザベスとの婚約の話聞きつけて、飛んで来た所は、面白くて読んでいてワクワクしました。

エリザベスもダーシーの事が好きになってきて、実際に結婚を申し込まれたのは事実だけど、強引なキャサリン令夫人に対するのが負けていなくて流石だなと思いました。

ライバルが現れるとなおさら愛情が増すように、おかげでさらにダーシーへの気持ちが高まって二人の距離を縮められてよかったと思いました。

最初はちょっと嫌な人かなと思う人の方が案外良い人だったりするから、最初から決めつけるのは危険だなと思いました。

最初から印象の良い人はだんだんマイナスな所を見て来ると、結果的に嫌いになったりする場合があったりするから、ギャップ萌えみたいな感じもあったかもしれないなと思いました。

私は最初から愛想のいい人は、何かたくらんでいないか心配になるし、最初はあんまり好きではなかった人の事が好きになったりするの、私の第一印象もあんまり当にならないなと最近感じています。

ちょっとよみにくい作品だったのもあって、さらっと読んだだけなのであまり理解できなかったけど、面白い作品だなと思いました。

(おわり)

## えびせんと幸せ

前半部分は締め切りまでに読み切れなかったが、後半はなんとか間に合い、こうして感想文を書けた。

いわゆる少女漫画の王道パターンの源流のひとつではないかと感じた。

すれ違いに焦点を当て、周囲の人々の滑稽さで間を繋ぎつつ最後はしっかりゴールイン。

特に取り立てて人生の意義だとか人間とは何か？ だとかの大仰さは無いけれど、何故かどうしてそれでも読ませるのは、きちんとしたリアルな描写を丁寧に積み重ねていくことによって、「止められない止まらない」なスナック感覚を読者に与えているからだろう。

私は結婚に関しては感想を述べられるような立場に、どうしても無さそうな気がするので、他の事を書こうと思う。

やはり一番印象に残ったのはほとんどギャグ漫画と言ってもいいくらいな愉快的ベネット一家だろう。

現代だと若干わかりにくい描写についても、アイドルのことで姉妹喧嘩していると思えば、すんなり納得がいった。

例えばリディアだけ友達の伝手でコンサートに行く、なんてなったら、キディはもう気が気じゃないというのは想像に難くない。

ベネット夫人も馬鹿さ加減が全開だが、それによって最後の結婚もすんなり行ってしまうのは逆に皮肉が効いているなあ、と感じました。

風と共に去りぬのスカレットも、南北戦争が無ければもしかしたらエリザベスのようにレットバトラーと幸せになっていたのかも知れない。

こういう優しい幸せがやはり人にとって理想なのかも知れない。

そういう意味では、人生の意義や意味がホントのところはこの作品の中にあるのかも知れませんね。

(おわり)

## 『高慢と偏見』 下巻 ジェーン・オースティン作 感想文

「不似合いな夫婦の間に生まれた子供に必ずつきまとう不利益を、今ほど強く感じたことはこれまでになかった」(岩波文庫 下巻 P.40)

エリザベスはそう思っていた。

品位を持たなかった母と妹たちへの彼女悩みは、階級ということ以上に苦しかったであろうと思った。

自分をつくった家庭の現実からは理想の幸福は描けなかったのだ。

上巻の最後のダーシーの手紙に書かれていたように、「あなたのお母さまや三人の妹さんがしばしば申し合わせたようにまるで礼を欠いたことをなされ」との言葉がエリザベスの心を深く傷つけた。

何より自分が一番感じているからだ。

父は、母と妹三人には一切介入しない。

「妻の了見を大きくさせることも、娘たちに品位を持たすことも」しなかった。それが精一杯だったのだ。

「才能をもちながら、使い道をあやまったために生ずる禍」(P.40)

父の母への愛情はとても早い時期に冷めていたのだった。

(引用はじめ)

「若さと美しさが普通与えるところのあのうわべだけの上機嫌に心をうばわれて、一人の女と結婚したのであったが、その女は理解力が弱く心が偏狭なので、結婚すると間もなくその女にたいする真の愛情はおわりを告げたのであった。尊敬と好意と信頼は永久に消え、家庭の幸福という考えはすっかりくつがえされた。けれどもベネット氏は自分の軽率から出た失望のかわりに、よく不運なひとたちが、自分の愚かさ慰めとする快樂に、慰安を求めるようなたちの人ではなかった—中略—

真の哲人というものは、与えられるものからせいぜい利益をひきだすものなのである」岩波文庫 (P.39~40)

(引用おわり)

結婚してすぐに父はすでに家庭の幸福を放棄したという悲しい現実があったのだ。

一組の夫婦の安易な結婚が、子供の将来をも左右してしまう。

しかし、父は父のやり方で、欲望に走らなかった。

絶望の父がやむをえなく選んだ生き方をエリザベスはしっかりと見つめ理解して、哲人となすに足る父を尊敬している。

エリザベスの理知と想像力は、この不幸な家庭から生まれていったのである。  
またこの現実が、エリザベスを成長させたとも思った。  
エリザベスがいなければ今のベネット家はなかったと感じる。

エリザベスは、その変えられぬ与えられた環境の中で苦悩し、大きな幸せを勝ち取っていったのだ。

「あたえられるものからせいぜい利益を引き出すのである」

父とエリザベスはとても似ていた。

「夫婦生活の幸福とか家庭の楽しみ」など父と娘は想像しえなかった。その中で確固たる信念をもった生き方を、苦しみながら見つけていったエリザベスが、とても輝いて見えた。

ありとあらゆる「高慢と偏見」の中で。

想像と違った内容でした。

とても面白く読ませていただきました。

(おわり)

## J.E.M.K.L と私の結婚

恥を忍んで申し上げるが、本書『高慢と偏見(下巻)』を読み終えて率直に思ったのは、「私だったら、ベネット家 5 人姉妹の中で誰と結婚しようかなあー」といった事である。そこで今回、我が結婚に先立ち、姉妹それぞれの人物像を明らかにした上で、私に相応しい相手は 5 名のうち一体誰なのか、その審査結果を発表する。

### ▼5 人姉妹の特徴:

- ・長女ジェーン: 誰に対しても優しい。愛嬌あり。器量よし。
- ・次女エリザベス: 理知的。正直者。器量は並。
- ・三女メアリー: 読書家。音痴。器量は下。メガネ。
- ・四女キッティ: ※特徴を判別できる描写が少ないため不明※
- ・五女リディア: 無鉄砲。愛嬌あり。器量は並。

### ▼私見による人物評価:

前述の特徴を踏まえ、結婚を前提とした人物評価を行う。

まず、「四女キッティ」は人物描写がほぼ無く、裏を返せば彼女は没個性といえる。

次に、「三女メアリー」は陰気である。それは別に構わぬがメアリーの致命的な欠点に「見栄っ張り」という性質が挙げられ、作中序盤の舞踏会(第 6 章)における、場の空気を読まない誰も望んでいない彼女の楽器演奏はその最たる事例だといえる。演奏直後の、<<虚栄から、稽古には熱心だったけれど、また同じ虚栄から、知ったかぶりや生意気な態度を示した>> という評価は的を射ており、彼女の歌(第 18 章)、彼女の教訓(第 47 章、第 61 章)の場面においても虚栄の女である。

じゃあ、「五女リディア」はどうかというと、天真爛漫といえは聞こえはいいが、ウィカムとの駆け落ち(第 46 章)、そして彼女がエリザベスへ送った手紙(最終章)を読む限り我儘で傲慢な性格であり、私なら出会って 3 秒でリディアとの縁談を辞退するに違いない。

んでもって、「次女エリザベス」はってえと、第 1 章においてベネット氏が <<リジーは、あれで、姉妹たちよりは賢いところがある>> と妻に語った様に、彼女は理知に富んでおり、さらに、キャサリン夫人とのダーシーを巡る論争(第 56 章)においては、物事を冷静に判断しつつ、相手が誰であろうと一歩も引かない勝ち気な性格が窺える。私は、学生時分に参加した弁論大会の場で法学部首席の女性に、私の主張の欠陥を徹底的に指摘された挙句に大敗、一同の失笑を買ったトラウマを思い出した。

ほんなら、「長女ジェーン」はどうかつと、一番イイなあって思った。それはビングリー氏による <<ベネット嬢以上にうつくしい天使があるもんじゃない>>(第 4 章) といった、作中一貫して変わらぬ態度もそうだが、彼女は誰に対しても平等であり、優しい。美人ときている。んー。でも、どうかな。頼めば何でもしてくれる優しい女性、一緒に居て張り合いの無い女性ということだろう。それは意外性という刺激、つまり面白味に欠けるだろうし、言い方は悪いが●●っぽくもあり、もっとうと■以下▲▲女の匂いがプ●プ●と漂っている。

▼審査結果:

今回は「該当者なし」という結果に至ったものの、ただこうして各人物を調査して気づいたことがある。本書は、読者から一番人気がありそうな長女ジェーン(あるいはビングリー氏)を主体として物語を構成するのではなく、あえて、次女エリザベス(あるいはダーシー氏)を中心人物として配置している。このことから、本書は月並みの恋愛小説とは一線を画した、偏屈者 2 名によるユニークな会話、心理描写が随所に展開されており、そういった点に著者・オースティンの創意工夫がある様に思う。

といったことを考えながら、この感想文を同僚の女性社員数名に見せたところ、半殺しにされた。

以上

(おわり)

## 「純真さ」

私が一番興奮し気持ちが盛り上がったのは、ペンバリー館の部分(43~44章)だった。

エリザベスにノーと断言されたダーシーだったが、予期せぬ再会で、二人とも気まずく、顔が紅潮しながらも、ダーシーは丁重にエリザベスに接する。ミセス・ベネットの弟夫婦にも丁重に接する。エリザベスは面食らうが、その後勝ち誇った気分になる。

私はこの部分のダーシーの行動は意外だった。エリザベスに対して、このクソ女とっていないようだった。下品な家族に囲まれた格下のエリザベスに振られたので、なにか腹いせに嫌味でも言って来るのかと予想していたが、振られる以前より、エリザベスに敬意を払っていた。

その後、もうエリザベスにはお断りされているのにも関わらず、ダーシーは自分の妹のジョージアナを紹介する。

フィアンセに紹介するなら納得できるが、お断りした女性に、というのは信じがたい。

もう一回エリザベスに求婚するのかと期待させ、私はここで一番気持ちが盛り上がった。

ラストに二人は結ばれるが、一つだけ疑問に思ったのは、純真さという言葉だった。ダーシーとエリザベスの、ダーシーの手紙を振り返る会話で、エリザベスは、嫌なことは忘れるに限る、これは私の人生哲学だからあなたも見習ってね、という主旨の話をする。それに対しダーシーは、こう答える。

(引用はじめ)

『あなたがそういう種類の哲学を持っているとは思えないな。あなたの過去の記憶は一点の非のうちどころもないもので、そういう過去から生じる満足感は、人生哲学によるものじゃない、もっと好ましいもの、つまり純真さから生じるものなんです。』〈光文社古典新訳文庫 P.291〉

(引用終わり)

この純真さ、という言葉はどう理解すればいいのか、私はひっかかった。

上巻で、風邪で寝込んだジェインのために泥だらけの格好で現れたエリザベスにダーシーが見惚れる場面がある。この部分が、エリザベスの純真さなのだろうか？ この言葉だけ、いまいち、ピンと来なかった。

『高慢と偏見』は、人間関係と登場人物の心境の変化が繊細で、しかも重層的で、私には読解するのは簡単ではなかった。

細部まで気づけてない部分もいくつかありそうなので、繰り返し読んでみたいと思った。

(おわり)



## 永遠の愛の存在

結婚というものはなんですかのたろう？ しなくてはいけないものなのたろうか？ と既婚者のクセに「高慢と偏見」や来週の記事図書、川端康成「古都」、三四郎と広田先生の掛け合いを読んで考えさせられました。

近代人なら当人同士が決めて、結婚して、困難なことを乗り越えていくのが理想なのでしょう。

幸い私は相手との階級の違いで婚姻に悩むとか、とんでもなくおバカな兄弟がいてひっかきまわされたとか、親戚のおばさんがしゃしゃり出て反対してきた、なんて経験もなく入籍し、バカ面を晒して挙式・披露宴を挙げました。

ただその後の結婚生活が理想通りだったのか？ そもそも理想を描いたいたのか？ さえも疑わしいところです。少なくとも今の私がパートナーになってほしいと思う人は、与謝野晶子さん、岡本かの子さんみたいな考えの人。そんな人絶対にいない、存在しない、なんてことはないか。

この愛は永遠、なんて歌の文句に出てきますが、永遠なんてものが本当に存在するのか？ 宮澤さんがカントの解説で直線を引き続ける。なんて話をされていましたね。

どんなに周りから祝福されようが、駆け落ちの末結ばれようが、他人と一つ屋根の下で暮らしていくにはラブラブきらきらハッピーだけでは到底続かないというのが私の印象です。直線を引き続けないと。

では最後にどぶろっくの「〇〇な女」でお別れです。宮澤さん、お願いします。

『女女女女 女女女 女女女女

美人で性格も良くて料理もできる女は・・・

存在しない 存在しない

絶対いない いる訳がない』

私は女性蔑視をしておりません、以上

(おわり)

## 恋と革命、弁証法的発展のシーケンス

(引用はじめ)

主義としてではありませんが、実行においては、私は生涯利己主義者でした。(中略)不幸にも一人息子だったので、(いや、長年の間、一人っ子でしたが、)私は、両親に甘やかされて、両親はいい人でしたが、(殊に、父はとても慈悲深くやさしい人でしたが、)わたしのことは、利己的で横柄であるように、自分の家族以外のものは誰も好きにならないように、世間の人たちを軽蔑するように、少なくとも自分のにくらべて、世間の人たちの分別や徳を低く見たがるように、かまわないで置くか、仕向けるか、教え込むかしたのです。八歳から二十八歳までは、わたしはそういう人間だったんです。そして、もしあなたが、いとしいかわいいエリザベスが、いなかったら、今でもわたしはそういう人間だったかもしれないんです！ すべてあなたのおかげなんです！

岩波文庫 下巻 第58章 P.244

(引用おわり)

高慢と偏見に囚われていたダーシーという青二才が、エリザベスに恋して、一度は告白してふられることで、自分の性格の欠点である利己主義を自覚して、克服していくことが描かれている。

利己主義というのは克服するのが難しい。

貴族で資産家で、何の不自由もないのに、どうして結婚する必要があるかといえば、貴族の家系を維持するという目的のためである。そこに、利己主義以外の何があるのか。

イギリス王室の藩屏になるためだとか、階級秩序を維持するためだとか、封建主義的ないろいろあるのかも知れないが、そんな社会背景はこの作品には書かれていない。

身分階級の違う男女が障壁を乗り越えて、自分の好きな相手と一緒にするというロマンが描かれている。

キャサリン・ダ・バーグ令夫人が、彼らの婚約を阻止しようとして、ベネット家に怒鳴り込んでくるドラマチックなシーンがあるが、あれは、階級的偏見である。

しかし、障壁の中での最大のものは、ダーシーの心の中の、ぬぐいがたい高慢と偏見である。

ブルジョワ市民社会の成熟によって、貴族とブルジョワの階級対立が和らぎ、続いて、彼らと労働者階級の政治的対立に移行していくのである。

この作品の 100 年後くらいには、労働者階級の森番メラーズが、ブルジョワ出身の貴族令夫人チャタレイの高慢と偏見を取り除いていく。

そして、田舎の地主貴族出身のクズ男が、戦後に流行作家となり、愛人と入水して情死するまで、あと 150 年である。

マルクスが洞察した歴史の弁証法的発展のシーケンス(連続)は、文学作品に描かれた「恋と革命」を通して、浮かび上がってくる。(なんじゃそれ)

(おわり)